

しかし、

人間は自然を汚すことにはいかに巧みで強力であつたのでしよう。それにひきかえ、自然は、その事に対していかに従順であつたのでしよう。

夕陽のかかった平盆の湖は、彎曲した水面を空にさらし、慟哭していますよ。……もうこの緑濁色の水のおおむ水界には、どんなロマンも美辞麗句も通用しそうにないのです。……

この時に、悲しい風が吹きよせて、全ての斜陽は文明と自然と人の象徴に見えたんです。

一昨日、高村先生が私達に「桜川」に投稿するに当つて、読んでみたらと差し出された本は「なにが環境の危機を招いたか」(パリイ、コモナー著、安部喜也。半谷高久訳、ブルーバックス)でしたが、特に「エリー湖の水」の章を読めと言ふことでした。で、読み始めて、なぜその部分を指摘されたのか、すぐわかったのです。それは、昨年、夏に霞ヶ浦で起つた有機汚染に伴なう異常現象と同様の事が、ここ十年間にエリー湖でも起つてゐるという話だったのです。

その話の結論というのは、流入した有機排水による過剰な栄養源は、結局湖底に堆積してゆき、なくならない

という事なのです。そして、堆積した栄養源は、いつかは一挙に放出されて、急激に湖の死を宣言するといふのです。ならばエリー湖は以前の姿に戻れるかといふと、著者は「決してもどらないと考へてよいであらう」とあつさり言うのです。その言ひ分は、痛快ですらあつたのですけれど、この痛快さの後は、非常な緊迫感がただよっていると思われました。

そして、著者は「エリー湖に対して我々が与えた打撃の成り行きは、次のようにまとめられる。すなわち、我々は、不可逆的に変化させ、現在および将来において、その価値を著しく低下させてしまった。我々は、もはやこれ以上、このような道をたどり続ける訳にはいかない」と言いくるめるのです。今、私達は同じ事を「エリー湖」を「霞ヶ浦」に置きかえて言う事ができるのであります。

霞ヶ浦の汚染は、文明の進歩のための代替であつたのです。同著はさらに、

「もし現代技術が生態学的な失敗を犯している事が、その目的を果した結果によるものだとすると、目的そのものがまちがつていた」と、言い切るのであります。汚染は、現代技術や文明の進歩が野放図にしてきた結果の投影なのです。この著は、右のようにとても示唆的で明解な解答をあたえていると思ひました。